

出稼ぎと市民の間（現地レポート特集）

著者	山口 真美
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	176
ページ	4-7
発行年	2010-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004502

出稼ぎと市民の間

山口 真美

全国各地から仕事を求めて人が集まる広東の工場地帯には、彼らの生活を構成する独特な社会が広がっている。町の風景は、工場家屋と、ペランダを埋め尽くすワーカーたちの洗濯物が目印の工場の宿舎。そしてこれらの工場に出稼ぎに来る人々たちを目当てに、地元の農民が建てた六

（八階建ての細長い集合住宅。一食五元（一元〇約一四円）からの安い飲食店……）これらが町の圧倒的な空間を占める。工場の終業時間が過ぎると町の至るところに人があふれ、道路工事やゴミ回収といった公共サービスは常に需要に追いついていない。この町では、人が多く治安が悪いのを誰もが嘆いている。それが、何十年も変わらないこの町の特徴だという。

ここは、最初はお稼ぎの町だった。つまり、全国各地の農村から集まる若者が、結婚前の数年間働き、結婚資金や自宅の建築費用を貯金してまた帰省することが多かった。しかし、改革開放から三〇年を経て、彼らの出稼ぎ生活は長期化している。それ

と共に、家族も含めた生活形態は多様になってきている。ここでは、深圳の日系企業に働く三人の地方出身者の人生から、彼らが何を思い、どこへ向かおうとしているのかを考えてみたい。

工場ワーカー・ユンさん ■農村から深圳の工場へ

深圳の日系工場で働くユンさん（四三歳・女性）は、一九九二年に四川省の農村から初めての出稼ぎで、深圳に来た。三人姉弟の長女として、農家に生まれた。当時は五年制だった小学校を卒業した後、中学の入学試験には受かったものの、進学しなかった。当時の中学の授業料は一学期わずか三元、それでも払えなかったからだ。中学に進学した同級生が、進学の翌週には学費を払うための借金に苦労していたのを覚えている。深圳に来るまでの就業経験といえば、地元での農作業と、一年に二シーズンだけ操業する養蚕工場 で働いた経験が全て。養蚕工場の一シーズンは二〇日程度、数十元の収

入になった。

一九八六年、二〇歳で近所の人に紹介された夫と結婚。一九八七年に長男、一九八九年に長女を出産した。夫は長女が生まれてから、深圳に出稼ぎに出た。最初の数週間、ビール工場 で働いた。賃金は良かったが、細心の注意を払わなければならない重労働と、常に人に監視されている不自由を嫌って、二〇日間で辞めた。今は、夫はその後自営で始めた内装請負の仕事で兄弟のチームでやっていく。

ユンは、一九九二年に深圳の夫の下へ来て、ちょうどワーカーを募集していた今の工場に入社した。最初の仕事はプリンターの生産ラインで、紙がスムーズに送られるかどうかを試す簡単な作業。それを七〜八年した。夫も出稼ぎに出た後、田舎では農業も、家事も、その他いろいろな力仕事も、あらゆることを一人でしなければならなかった。工場の仕事はそれと対照的で、同じ一つの作業をただひたすら繰り返す単調なもの。当時、夫と一緒に住んでいた借家から工場は徒歩五分と近く、昼も夜も食事は工場の食堂を使わず、家に帰って夫が作ったものを食べた。その頃は、田舎で一人で奮闘していたときに比べ、出稼ぎ生活は苦にならないと思った。

■子供たち

二人の子供は、中学二年までは深圳で私営の小中学校に通い、中三から田舎に帰した。中三で田舎に帰したのは、高校進学のため。小中学校は出稼ぎ家庭の子供たち向けに私営学校がたくさんあるが、高校は今のところ戸籍のある故郷へ帰って進学するしかない。

上の子供は高卒後、大学受験に失敗し、三年制の職業技術学校へ通った。二年間通学し、最後の一年間は企業へインターン（実習）に行く。息子は学校に紹介された広州の椅子工場で一年間働いた。職業技術学校の紹介とはいえ、生産ラインの一般ワーカー。月給一〇〇〇元余りで親の出稼ぎと何ら変わらない。息子はこの仕事に満足せず、インターン終了後この会社に就職はしなかった。学校はすでに卒業したが、就職はまだ決まっていない。

下の娘も中三で帰省し、高校に進学した。大学には受からず、兄と同じように技術系の学校に行かせようとしたが、兄を見ていた娘は、直接働くことを選んだ。学校に行っても結局、自分で仕事を探すことになる。同じことなら、親に経済的負担をかけたくないというのが彼女の理由だった。今は、自分で探した広州の私営の家具工場で営業をしている。営業の仕事は一日八時間で、工場労働



正月休みでにぎわう深圳市歓瀾街道の町角

働より就業時間が短い。外回りも多く、比較的自由だと言っている。

■出稼ぎ生活の記憶

工場では、これまでの一七年間で仕事内容が二回変わった。いずれも簡単な作業。仕事上の辛いことといえば、失敗してライン長に怒られたりすること。毎日単調な作業をして

いると、家のこと、子供のことなどで心配事があるとき、ミスをしてしまうこともある。ただ、子供はすでに大きくなり、親が心配しても仕方がない年齢になった。自分のことは自分で考えるから、お母さんの心配は余計だと言われる。これまでの人生は夫と二人で子供の教育費をひたすら稼いできた人生だった。出稼ぎとは、そういうものだと思う。

毎日の生活は、朝起きて顔を洗い、歯を磨き、食事を済ませて出勤する。出勤したら朝礼。午前の仕事が終わったら家に帰り、昼食。食事を終えたらまた出勤する。出稼ぎ生活は毎日がこの繰り返し。もうすっかりこういう生活に慣れた。他のことを考える時間もいまま、こんな歳になってしまった。深圳は発展していて、商売でもすれぱいろいろチャンスがあると思うが、今更商売もできない。最初に出稼ぎを選んでしまったから、今日までこの生活を繰り返してきた。

この記憶を、下の世代に活かしてほしい。私たちの世代は、学歴も低く、小心だったので、出稼ぎしかできなかつた。子供たちには、出稼ぎだけはしないでほしい。出稼ぎ生活は大変で、その給料では最低限の生活を維持することしかできない。出稼ぎで金持ちになることは、夢にもあり得ないこと。子供たちには、商売でも、何か他のことでもいい、自分と同じ仕事はしないでほしい。何かしたいことがあれば恐れず、大胆にやってほしい。

■管理職・シンさん ■高卒で深圳へ

同じ会社で事務系の管理職のポストにあるシンさん(三五歳・男性)は、広東省北部の農村出身である。父は村の医者、母は農民の家庭に育った。三人兄弟の真ん中で、兄も妹も深圳で働いている。

一九九二年に深圳に来て、別の工場に二ヶ月勤めた後、今の会社に入った。配属先は倉庫管理の現場で、普通ワーカーとして入った。二ヶ月後にライン長、二年目から新しくできた事務部門の末端管理者になった。ちやうど、会社の部署が整備されてきた時期で、比較的スムーズに昇進し、一年と経たずに課長に就任した。管理職になったこの頃から、社内外での日本人との仕事が増え、

独学と社内の授業を併用して日本語を勉強した。また、最初の工場に勤めている間に、転職に供えて電気工の国家資格も取得している。高卒ながら専門技術を持たない彼は、電気工の資格を持っていけば後々の転職に役立つと思つてのことだった。ただ、今の会社に勤め、安定したので、結局この資格を使つて転職することはなかつた。

■家族・戸籍・マイホーム

一九九九年に同じ故郷の出身で深圳のデパートで働いていた妻と結婚。二〇〇〇年に妻も彼の紹介で同社に転職、今は同じ会社で共働きをしている。六歳の一人っ子がいて、昨年九月から深圳の公立小学校の一年生になった。深圳戸籍がない子供が深圳の公立校に通うための手続きは、二〇〇九年の後半に改正されたばかり。深圳市での居住証明、計画出産証明、社会保険への加入証があれば認められる。子供の入学時にちやうどこの政策が発表されたので、無料で公立校へ就学できた。以前、公立校へ通学するためには、多額の金を払わなければならなかつた。この政策が出たため、一人っ子であれば小中学校への就学は戸籍の制限がなくなつた。ただし、多くの出稼ぎ家庭は二人目、三人目の子供がいて、計画出産証明がない。また、

今のところ高校進学時点ではやはり戸籍のある土地に戻って進学するしかない。子供が大きくなるまでに、この制限も緩和されるといいと思っている。

自分のような外来の労働者は、深圳市の戸籍を持っていないため、深圳の優遇政策を受けられない。子供の教育が最大の問題だが、その他政府が供給する低価格住宅の購入権がないこと、医療保険の種類が深圳市民とは異なり、通院できる病院も自己負担額も違うのが戸籍のないデメリットだ。

二〇〇八年にこちらで六五平米の集合住宅の一室を買った。「共同建設住宅」（注：不動産取引が正式には認められていない土地に建てた建物。「合作建房」と呼ばれ、広東では普及している）なので安く、一五万円だった。これが正規の不動産開発住宅（商品住宅）なら、六〇〜一〇〇万円ぐらいする。今の収入では商品住宅はとも買えず、現実的な今の家にしたが、将来チャンスがあれば、より環境のいい、きちんとした住宅（商品住宅）を買いたいという思いは当然持っている。

戸籍は今も田舎にあるが、将来深圳に転入したい。そのためにも、夜学の大学本科コース、工商管理専攻に入学した。大卒の学歴があると、転職にも有利だし、将来深圳市の戸

籍を取るためにも大卒学歴が求められる可能性がある。

■技術系管理職・ジュンさん
■転職で技術を蓄積

湖北省の西部にある地方都市出身のジュンさん（三四歳・男性）は、政府機関と国営企業に勤める両親の下に生まれ、一九九七年、専門学校（「大専」と呼ばれる高校卒業後に進学する三年制の高等専門学校）の機械専攻を卒業している。戸籍は非農業戸籍、「農民工」ではないが、地方出身労働者である。卒業後、学校の紹介で勤めた国営企業は二年後に倒産した。そのため、二〇〇一年に深圳に出稼ぎに来た。

最初の仕事はスペイン資本のバス・トイレ器具メーカーで、技術サポートを担当。この仕事では、3Dの機械設計ソフトを使って図面を読むことが求められた。専門学校で学んだ基礎があるので、それほど難しくはなかった。さらに、自分でも図面を描けるように、仕事しながら学んだ。二〇〇一〜〇四年の三年間この会社に勤め、賃金は当初の月額一八〇〇元から二八〇〇元が増えた。

機械設計ソフトを使った設計技能を一通り学んだあと、設計の経験を積むために転職した。金属プラスチックの金型工場を始め、深圳で三社を転々とした。この時、賃金アッ

プはそれほど重要ではなく、機械設計の実践を学びたかった。金属、玩具、靴など、それぞれ業種が違つと、金型が違う。いろいろな業種の機械設計を経験したかった。この間に月給は二五〇〇元から最後の会社では三五〇〇元になった。

■心境の変化

〇〇〇元は低かったが、それでも受け入れたのは仕事内容の魅力が大きかったから。現在は技術課の課長になっている。

若い時は、新しい技術を学ぶため

二〇〇七年に今の会社に転職した。人材市場のインターネットで情報収集し、エンジニアを募集していたこの会社に応募、試験と面接の末に採用された。海外向けの電子製品メーカーであるこの会社は、製品の種類も分野も多様で、技術的にいろいろ経験できることが大きな魅力だった。自分の期待賃金三五〇〇元に対し、会社から提示された三



出稼ぎ者の子供向け私営学校：スクールバスの送迎と給食付きで学費は年間5000元。この学費は、他の都市の同類の学校に比べても格段に高い

に転職し、勉強してきた。当時はとにかく勉強への意欲が強かった。全ては自分のため、さらにいえば、より高い給料のためだった。今では当時とは心の持ちようがとてむ違つ。今何よりも重要なのは、家族との関係だと思つている。金は生活に足りればそれでいいと思つようになつた。人間は、子供を持つと子供のために生きるものだというが、本当だと思つ。以前は自分のために生きていた。

二〇〇〇年に、二五歳で結婚した。妻は深圳で同居し、スーパーで働いている。一人っ子の子供は田舎で、両親に預けている。子供はすでに八歳になるが、これまで一緒に過ごした時間を全て足しても、一年にも満たない。親子の交流が少なく、それが成長の上で大きな問題であることは、子供が大きくなる度にますます強く感じるようになった。それで今、一刻も早く子供と一緒に生活できるように、自分の人生を調整しなければならぬと思つている。

子供の人生を考えると、今は最低でも大学に行かなければいけないと思つ。そのためには高校に進学する必要があるが、今の政策では高校は戸籍のある地元で行くしかない。そのため、故郷できちんと教育を受けさせたい。子供によい教育を受けさせるためには、自分の稼ぎが必要

だが、自分がここで出稼ぎを続ける以上は子供のそばにいてやれない。それが大きな矛盾。今の知識、技術を活かせる仕事は、内陸の地方都市ではまだ見あたらない。そのため、今は子供と一緒に暮らすため、四〇歳までには田舎に帰つて商売でもして生計を立てることを考えている。姉たちが商売をしているが、収入は自分に比べても決して悪くない。ただし、商売にはリスクがあり、苦勞も多い。また、これまで身につけてきた専門知識は無駄になることになる。それでも、子供の側についてやることには代えられないと思つ。今の仕事には満足しているが、家族の生活を取り戻すためには、このまま長く働くことはできない。

●「出稼ぎ」と市民の間

冒頭のユンさんは夫と共に賃貸住宅に住み、深圳の私営学校と故郷の学校を往き来させながら二人の子供を育てた。夫婦の出稼ぎによる収入は、全て子供たちの教育費に費やされたが、二人の子供は結局、どちらも大学には行けなかつた。子供たちには出稼ぎではない何か別の仕事をして欲しいと期待するが、その将来はまだ見えない。

三〇歳代半ばの二人の男性は、それぞれ違う方向を目指し始めていく。シンさんは深圳で住宅を購入し、

子供を公立校に通わせ、将来政策が改善されることと自ら深圳戸籍を取れることを期待しつつ、今の土地での定着に心を決めた。一方、子供を故郷に残し、夫婦共に深圳で働くジュンさんは、これまで努力して蓄積してきた専門技術とそれを活かせる今の仕事に未練を残しつつ、家族と一緒に暮らせる生活の実現を最優先に、今後の人生設計を考え始めていく。

シンさんやジュンさんのような、工場の管理職についたスタッフばかりか、ユンさんのような生産ラインのワーカー層も、この町に長く住んでいる。住居の形態では、独身時代は工場の宿舎に住み、結婚すると付近の民家を賃貸して夫婦で住むことが多い。地元の農民が建てた賃貸住宅は、単身者が住むワンルーム(厨房施設・トイレシャワー付き)で月額一五〇元、夫婦二人か子供と一緒に住む家庭では2DKで月額三〇〇〜三五〇元ほどの賃料が一般的である。しかし、子育てのため、故郷から両親を呼び寄せて一緒に生活する家庭も多く、その場合はさらに広い住宅が必要になる。深圳で長く働く見込みを持つ地方出身者は、シンさんのように住宅を購入するケースも少なくない。ただし、一般的な給料で手が届く価格の住宅は正規の手続きを経た商品住宅ではなく、地元政

府や個人とのインフォーマルな土地取引の上に建つ集合住宅であることが多い。これらの住宅は建物の契約の上では六〇年、七〇年という使用権を持つものの、実際には土地の区画変更などがあれば住み続けられる保障がない。

子供の就学は私営の小中学校が一学期二〇〇〇〜二五〇〇元(一年は二学期)という高い学費と引き替えに、共働きの両親に替わつてスクールバスによる送迎と、給食サービスを提供する。公立校による外地戸籍の子どもの受け入れは、広東では他の地域に比べても遅れているといわれる。

町は、住人たちの定着化と共にそうした出稼ぎ家庭のニーズを満たすサービスを提供するようになってきている。しかし、そのほとんどが市場サービスであり、公共サービスは昨年やつと、公立校での無料受け入れが始まったばかり(それも厳しい制約付き)だ。家族と一緒に暮らし、その生活を営むための仕事があり、子供は必要な教育を受けてそれぞれの将来を選択する。若い世代は今、上の世代の出稼ぎ労働者には望むべくもなかつた「普通の生活」を求めて葛藤している。

(やまぐち まみ/在北京海外研究員)